

KUROSAKI

黒 崎

(仮 称)

KOKURA

小 倉

HIGASHIDA

東 田

2050

まちづくりビジョン

たたき台

令和3年7月

北九州市



INDEX

0. はじめに

1. 将来を見据えた「まちづくり構想」について

- ▶「これまで」と「これから」のまちづくり
- ▶構想の目的・役割／構成／対象エリア／位置付け
- ▶構想の描き方

2. 「将来トレンド」を掴む STEP.1

3. 「地区特性」を把握する STEP.2

4. 地区の「将来の姿」を描く STEP.3

小倉地区

- ・2050年 まちのビジョン
- ・ターゲットプレイヤー/パフォーマンス・活動
- ・2050年 まちのイメージ

黒崎地区

- ・2050年 まちのビジョン
- ・ターゲットプレイヤー/パフォーマンス・活動
- ・2050年 まちのイメージ

東田地区

- ・2050年 まちのビジョン
- ・ターゲットプレイヤー/パフォーマンス・活動
- ・2050年 まちのイメージ

5. 2050年のライフスタイル提案

6. おわりに

0. はじめに

策定の背景

- 日本の人口は、平成20年をピークに減少局面へ転じました。本市の人口は、昭和54年をピークに全国より約30年早く減少へと転じています。
- 本市の中心市街地である小倉・黒崎においては、土地利用の更新が進まず、駐車場をはじめとした低未利用地や建物の空き床が増加するなど、厳しい局面を迎えています。
- 高次な都市機能は集積しているものの、今後も続く人口減少等による経済活動の縮小に加え、コロナ禍での新たな生活スタイルの広がりにより、今後さらなる投資控えや消費控え等が懸念されます。
- 近年、小倉・黒崎では駅前の大型商業施設が撤退し、東田では大型テーマパークが閉園するなど、地区経済に追い打ちをかける出来事がありました。
- しかし、悪い状況ばかりではありません。小倉では、統合型リゾートIRの誘致について議論を行った際、都市のポテンシャルを再認識できました。黒崎では、現在も新規マンションが建設され、地区内人口は増加しています。東田では、広域集客の見込めるアウトレットモールを核とした新施設の整備が進んでいます。これら3地区では、近年、新たな民間開発等により、都市イメージの向上に寄与する変化が起こってきています。
- このような都市再生の芽が出てきている今こそ、ネガティブな状況を打破し、本市が将来目指すまちの方向性について議論し、新機軸を発信していきます。

これから求められるまちづくり

- これからの縮小の時代においては、不安定・不確実・複雑・曖昧な事象が多く起こり、将来が見通しにくくなるでしょう。そうなれば、これまでの成長の時代のように、その時その時で対処的に取り組むのでは、上手に立ち回ることが難しくなります。
- 今後は、まずいったん足元をフリーにして将来目指すまちの姿を描き、そして、それを皆で共有し、将来像に向かってベクトルを合わせ、各々の取組を1つずつ進めて行くことが求められます。
- 長期的に目指す道が定まっていれば、将来目指すまちの実現に向け、着実に歩んでいくことができます。
例えば新型コロナウイルスのように、予測し得ない状況が今後起こったとしても、短期的にはイレギュラーな対応が必要となりますが、最終的には軌道修正されていくことでしょう。
- 本市は、2018年6月に国から「SDGs未来都市」に選定されたことを受け、同年8月に「北九州市SDGs未来都市計画」を策定しました。さらに、2020年10月、「2050年までに脱炭素社会の実現」を目指す、ゼロカーボンシティを表明したところです。これからのまちづくりにおいては、SDGsの達成と脱炭素社会への実現に向けた取り組みを推進していくことが重要です。
- 本構想は、概ね30年先の2050年に本市が目指すまちの方向性をとりまとめたものです。本市のまちづくりに関わる方々に対して、本構想を広く示していくことで、多くの共感を得たいと考えます。将来のまちの姿に共感し、まちへ投資したくなる、消費したくなる、多くのファンを獲得できる、「選ばれるまち」になることを目指します。



北九州市SDGs未来都市

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



- 本市は、SDGsの達成に取り組むことで、『真の豊かさ』にあふれ、世界に貢献し、信頼される『グリーン成長都市』を目指していきます。
- また、このビジョンの達成に向けて、経済・社会・環境の三側面を統合的に取り組み、自立的な好環境が生まれることを目指していきます。
- これにより、本市のブランド力の向上につながるると同時に、世界全体のSDGsの達成に大きく貢献できると考えています。

ゼロカーボンシティ

- 産業都市である本市にとって、『脱炭素社会の実現』は高いハードルではありますが、『環境と経済の好循環』により、都市や企業の競争力を高め、国内外の脱炭素に貢献する『北九州モデル』を構築し、グリーン成長を推進していきます。
- また、2021年6月に『北九州市気候非常事態宣言』を行い、市民や企業、行政等あらゆる主体と気候変動問題への危機感を共有することで機運醸成を図り、2050年のゼロカーボンシティの実現に向けた取組みをこれまで以上に加速させていきます。

北九州市が戦略的に目指すエネルギーの将来像



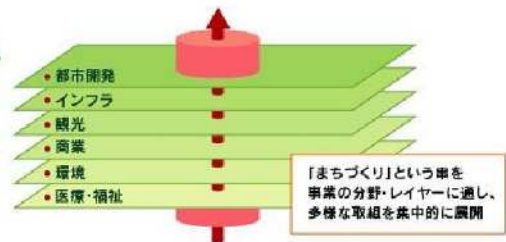
1. 将来を見据えた「まちづくり構想」について 「これまで」と「これから」のまちづくり

01 これまでの「成長時代」のまちづくり

- 開発圧力が強く相当額の財源がある中、公共・民間がそれぞれ個別に投資。
双方の各投資が一定のインパクトを与えてきた。
- 公共は、インフラを整備し、人やモノの流れを活性化するなど経済活動を誘発し、また、機能・用途の単純化、ゾーニング・分離等により、民間の旺盛な開発圧力を調整。

02 これからの市と民間が連携したまちづくり

- 限りある財源を、公共と民間が連携して重点的に投資。
双方の特性や強みを生かし、効果的に最大のインパクトを生む。
- 「まちづくり」という視点で串を通し、多様な取組をコンパクトなエリアで集中的に展開。



03 バックカスティングによるまちづくり

- 一旦足下をフリーにして、将来目指すまちの姿を考える。
- 目指す将来像と現状との間にあるギャップを捉え、ギャップを埋めるように、足元からひとつずつ取組を進めていく。
- 事業者や分野ごとに異なる、様々な企業活動等においても、将来を見通し、互いに長期的なベクトルを合わせることが必要。



04 経済活動等ニーズに適應したまちづくり

- 経済活動等のニーズを的確に捉えるとともに、ターゲットとなるプレイヤーを見定める。
- プレイヤーのパフォーマンスの最大効率化を図ることができるような、ニーズに適應したまちづくりを進める。チャレンジするまちのプレイヤーを積極的に応援する。
- 例えるならば、「まち」づくりとは、役者のための「舞台」づくりである。



プレイヤー(役者)のパフォーマンス(演技)を最大化するためのまち(舞台)をつくる



構想の目的・役割



構成



対象エリア



位置付け



構想の目的・役割

- まちづくり構想は、未来の新機軸を打ち出すために策定。

市にとって

市が考える将来目指すまちづくりの方向性について、あらかじめ明示する「メッセージ」となるもの

民間にとって

まちづくりへ投資を行う際、一つの重要な「判断材料」とするもの

市と民間にとって

お互いにベクトルを合わせ、将来に向かって同じ方向へと歩んでいくための「羅針盤」となるもの



構成

- 構想の目標年次は、一世代先の将来を見据え、概ね30年先の2050年とする。
- 一旦足下をフリーにして考えることのできるバックカスティングの手法によることとする。
- また、構想の下に、別途、当面5年程度を期間とする「実施計画」を策定する。構想実現に向けた個別の施策・事業等を記載する。



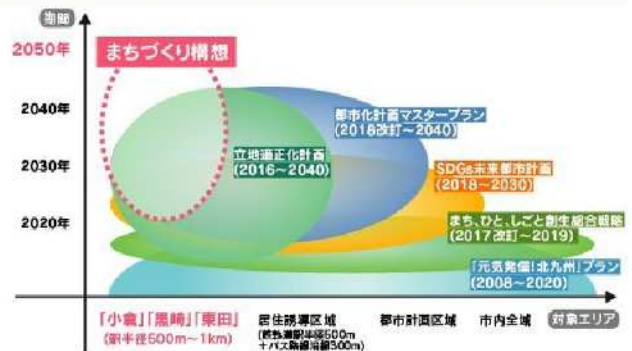
対象エリア

- 構想は、北九州市のまちづくりの核であり、かつ、近年、新たな民間開発など都市イメージの向上に資する変化が生じてきている「小倉」「黒崎」「東田」の3地区で策定。
- 集中投資するため、対象エリアはできるだけコンパクトに設定し、駅周辺概ね1kmのエリアとする。



位置付け(他の構想・計画等との関係性)

- 「元気発進!北九州」プラン、都市計画マスタープラン等は、本市全域を対象。
- 目標年次は、構想が2050年であるのに対し、「元気発進!北九州」プラン(2020年)や都市計画マスタープラン(2040年)等よりも先を見据えたもの。
- 小倉・黒崎・東田の対象エリア内においては、他の構想・計画に記載する取組に加え、本構想で描く将来のまちの姿を実現するための取組を付加して、まちづくりを強力に推し進める。



構想の描き方 ~ 2050年の姿を描くまでのステップ ~

STEP.1

「将来トレンド」を掴む

以下の3つの切り口から、チャンス・脅威を含め、社会の流れ・変化を掴む。

- 「人口動態」やコロナ禍で加速した「新たな生活スタイル」
- 「ゼロカーボン・技術革新・DX」の方向性
- 将来、世代の中心を担う「若者の意識・常識」

STEP.2

「地区特性」を把握する

業務・ビジネス、住宅、商業・サービス、観光・文化、交通等に関し、地区の歴史や地区固有の強み・課題など、特性を把握する。

STEP.3

『将来トレンド』と『地区特性』から

2050年における、地区の「将来の姿」を描く

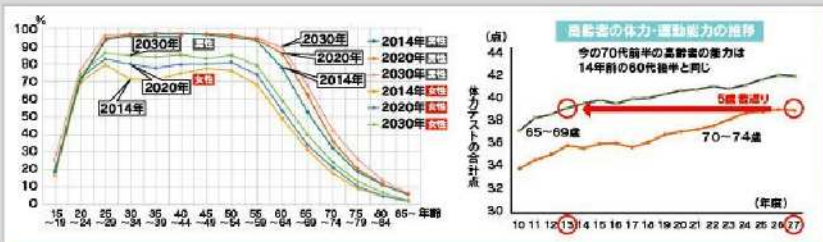
2.「将来トレンド」を掴む

STEP.1

人口動態・新たな生活スタイル

人口

- 日本は人口減少局面に。少子高齢化が進み、生産年齢人口が減少。
- 北九州市は昭和54年をピークに、全国より約30年も早くから人口が減少。
- 平均寿命・健康寿命は延伸し、高齢者は年齢と比べ元気に。人生100年時代。
- 働く女性が増加。高齢になっても働く人も増加。



経済活動

- eコマースはさらに進展。リアル店舗では、小売が縮退しサービスへ移行。モノ・サービスが手元に届くようになり、外出機会は減少。
- 情報について、人が移動し運んでいたものの多くはオンラインで伝達・処理される。一方で機密事項の伝達や細かい擦合せ等にはリアルな場も必要。
- 土地・建物に関し、低未利用地や空き床が増加。都市の外縁部から縮小するのではなく、都市内部に空き地等が点在する「都市のスポンジ化」が進行。
- 新型コロナウイルスのように、不安定・不確実・複雑・曖昧(VUCA: ブーカ)な事象が発生し、将来が見通しにくくなる。

ゼロカーボン・技術革新・DX

ゼロカーボン・災害

- 世界の潮流が「低炭素」化から「脱炭素」化に。企業は、企業価値向上のため、SBT・RE100など、国際的な環境イニシアチブに参加。ESG投資の呼び込みを促す。
- 地球温暖化等を背景に、集中豪雨による河川氾濫や土砂災害等、激甚災害が頻発するように。

IoT(Internet of Things)・センシング

- クルマや家電など、様々なモノがインターネットに繋がる。人もウェアラブル端末等を介して繋がる。カメラ等のセンサーも含め、あらゆるデータが取得されるとともに、モノや人の間で飛び交うようになる。
- 高速通信網を介して相互に受信した膨大なデータは、AIが最適化を図り、利便性の向上や余剰のカット等スマートな都市環境の形成、需要と供給の適切なマッチング等に活用される。

高速通信(5G・6G)

- 5Gさらには6Gの普及により、通信網は、高速・大容量、低遅延で、多数同時接続が可能となる。
- 完全自動運転やリモート手術等の実現に不可欠だけでなく、VR・ARによる臨場感あふれる体験等、エンターテインメントでも新たな価値体験を提供。

デジタルツイン

- リアル空間に存在するものをデジタル空間で再現。デジタル上でシミュレーション等を行い、リアル空間へ反映する。
- 都市全体のシミュレーションをデジタルツインで行うことも期待されている。

次世代を担う若者の意識・常識

価値観

- 2050年に世代の中心を担うのは、1995-2010年生まれ「Z世代」で、生まれた時からデジタルに慣れ親しむ「デジタルネイティブ」世代。
- SNSやデジタルデバイスの普及で、世界中の人々と繋がり、多様なコミュニティを形成。
- デジタルで情報を常に発信・受信し、デジタルでは得られない、リアルな感動体験に価値を見出す。

1995年



0歳 Windows95

2005年



9歳 facebook
10歳 youtube

2007年



12歳 iPhone
15歳 Instagram

2010年



Z世代



・2050年の世代の中心
・SNSの普及・デジタルネイティブ

- 生まれた時には既にインターネットが存在しており、デジタルデバイスに触れることが当たり前。
- 中学校でiPhoneが登場し、高校時代はスマートフォンを使って、インスタを楽しんでいた世代。

働き方

- 働き方の価値観が多様化。時間や場所、組織に捉われない柔軟な、自分らしい、マイペースな働き方を志向。
- 転職はポジティブに捉えており、ネガティブなイメージはあまりない。
- 働く場所、住む場所を選ぶ際には、環境の良さ、快適さを重視。



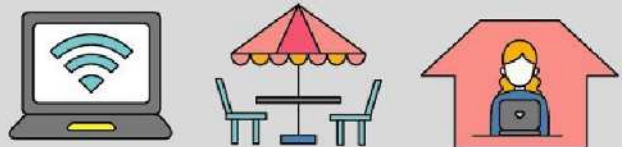
交通

- 人口減少や外出機会の減少等により移動総量が減少。電車・バス等の公共交通、自家用車等の交通量も減少。一方で、物流には一定のニーズ。
- 自動運転の実装を契機に、自家用車保有台数は減少へ。
- クルマは公共交通の1つのモードとして組み込まれ、サービスとしての利用が主流に。



空間デザイン

- 三密回避、ソーシャルディスタンスの確保等、屋内外を問わずゆとりの空間を志向。
- ストレスや軋轢のない環境、快適性やQOL (Quality of Life) を重視する傾向に。
- 仕事・勉強のテレワークが進むことで、時間の使い方がマイペースとなり、好きな時に好きな場所を選択するように。



AR

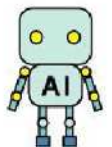
- 人の感覚・能力を拡張する技術。
- 現実世界の映像に対し、デジタルデバイスにより、位置情報等のデータ、実際にその場にはない映像・CG等を重ねて表示。コンタクトレンズ型等のデバイスのほか、網膜投影技術等によるものも。
- 他に、パワーアシスト、体調の感知・アラート、多言語同時翻訳等について、ウェアラブル型、体内埋込型を含め様々なデバイスが登場。

自動運転・無人タクシー/空飛ぶクルマ・ドローン

- AIで制御される自動運転の電車・バス・車・パーソナルモビリティ等は、都市空間の陸上・上空のそれぞれの領域で、人やモノの輸送に貢献する。
- 人を輸送する都市交通と、モノを輸送する物流の境は、徐々になくなっていく。

AI

- コンピューターが大量のデータを高速で処理するとともに、複雑な関係性から最適解等を導き出す技術。人が時間を割いてきたルーチンな作業等の多くは、AIが代替するように。
- 医療の画像診断や裁判の判決等、高度な判断が求められる場合にも、AIが膨大なデータベースから最適解を提示し、それを基に人が判断を下すといった活用も。
- 技術革新・DXのコアテクノロジーであり、自動運転、高度なシミュレーション、都市全体のマネジメント等に不可欠。



消費・サービス

- モノは「所有」するだけでなく、多数で「シェア」する。
- 日用品等はeコマース等を活用し、手間やコストをかけずに入手。
- 欲しいモノについてはリアル店舗に出掛けることも。
- フリーマーケット等で中古品、サブスクリプション等でサービスを購入することが多い。



人との繋がり

- 自分らしさを大切にする一方で、SNS等のオンラインを通じて、多様な人と広く繋がり、また、既存のコミュニティ・繋がりを維持する。
- リアル空間では、偶発的な新しい出会いを獲得し、また、既存の繋がりを深化させる。
- 特定の集団だけに属するのではなく、複数の多様なコミュニティに所属し使い分ける。グループのボーダーやバリアについての意識は低い。

